

〔原著〕

# 看護実践研究の特質の明確化に関する研究 その1 —看護実践現場の看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質—

大川 眞智子

## Study on Clarification of Characteristics of Nursing Practice Research Part1 -Characteristics of Nursing Practice Research in Collaborative Research by Nurses and University Faculty-

Machiko Ohkawa

### 要旨

岐阜県立看護大学（以下、本学）では、看護実践の改善・改革を目指した看護実践研究として、看護実践現場の看護職（以下、現場看護職）と大学教員の共同研究や博士前期課程における研究活動に取り組んでいるが、看護実践研究の特質は明らかではない。本研究は、看護実践研究の特質の明確化の第一段階として、現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質の明確化を目的とする。

看護実践研究の分析枠組み作成のため、看護実践研究のプロセスを丁寧に確認しながら進める本学博士前期課程の研究指導内容を帰納的に分類し、看護実践研究の構成要素を抽出する。次いで、本学共同研究（4研究）の報告書の記述内容から、看護実践研究の構成要素に該当する内容を取り出し類似する意味内容で分類する。

看護実践研究の構成要素として、【現状分析から導かれた課題】【利用者ニーズを基盤とした実践改善】【実践改善に向けた取り組みと成果の共有】【実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握】等の6要素が抽出された。共同研究における看護実践研究の構成要素の内容として、【実践者間での意見交換や事例検討を通して、支援の現状や課題を明確にする】【利用者の思いやニーズに基づいて、看護職に求められる役割や必要な支援・体制づくりを検討する】【実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後の援助のあり方を検討できる場をつくる】【実践者への学習的取り組みを通して、実践改善に向けた共通認識づくりや知識・意欲の向上を図る】等の13項目が導出された。

現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質として、1. 利用者と実践者双方の観点からの現状分析による実践上の課題の明確化、2. 利用者ニーズを中核にした看護実践方法の創出と還元、3. 看護実践の振り返りと意見交流を基盤にした実践者の意識改革の推進、4. 多機関・多職種連携及び実践者間の関係づくりの強化が考えられた。

キーワード：看護実践研究、共同研究、利用者ニーズ、実践改善

### I. はじめに

近年、看護実践現場において看護職者が研究に取り組む必要性が浸透し、積極的に現場で研究活動に取り組んでいる（坂下ら，2012）が、その一方で、取り組んだ研究の成果が現場で活用されず、看護職者が達成感を得られなかったり、その後の継続的な研究活動への発展につながら

ない現状もある（黒田，2006；大川ら，2015；田中ら，2006；宇多，2012）。しかし、Abdellah & Levine(1986/1993)が、「看護研究に基づく看護実践の改善がよく行われるところでは、実践の質は高くなる」と述べているように、実践の改善・改革や質向上を可能にするためには、看護実践現場の看護職（以下、現場看護職とする）による実践を基盤

1) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

にした研究活動、すなわち実践研究が不可欠である。

看護学と同じく実践を基盤にした学問においては、日本語教育における実践研究として、細川（2005）は、実践それ自身が研究であり、「実践」と「研究」を統合した「実践研究」とは、教師自身が自分の実践を内省的に振り返りつつ、その意味を確認し、他者とのインターアクションを積極的に受け入れ、より高次の自己実現をめざそうとする活動であると定義している。また、下山（2009）は、心理学の実践研究には、「実践を通しての研究」と「実践に関する研究」が含まれており、いずれの場合も、「その根拠（データ）を論理的な仕方で提示する」という過程が心理学研究として必要であると述べている。

看護学においては、実践研究が明確に定義づけられておらず、看護研究における実践研究の位置づけや研究手法は不明瞭である。近年では、実践現場への介入研究やアクションリサーチによる研究報告も見受けられるが、外部の立場から研究者が中心的に取り組んだものが多く、実践者が自らの実践の場で、実践の改善・改革を意図して現場に働きかけ、そのプロセス・成果を論理的かつ根拠（データ）に基づいて報告している研究は少ない。草郷（2007）は、アクションリサーチとは、「当事者（実践者）による問題解決の「プロセス」を重視したリサーチであり、当事者自身が問題解決の進み具合を図りながら、その実践活動を向上させるためのさまざまな手法の集合体ともいえる」と述べている。また、江本（2010）は、アクションリサーチは、「特定の現場に起きている特定の出来事に焦点を当て、そこに潜む問題状況（課題）に向けた解決策を現場の人と共に探り、状況が変化することを目指す研究デザイン」であるとしている。このようなアクションリサーチの理念や手法は、現場の実践改善を具現化する実践研究の研究手法のひとつとして有用であると考えられるが、実践者による研究報告は少ないのが現状である（北島，2012）。

岐阜県立看護大学（以下、本学とする）では、看護実践の改善・改革を目指した研究活動として、看護実践現場との共同研究や博士前期課程における研究活動などの看護実践研究に取り組んでいる。看護実践研究は、看護実践を基盤とした看護学研究方法の一つであり、この研究方法は、看護実践現場において、その現場で看護を実践している看護職者が、自施設あるいは自部署の実践上の課題を明確にして、その課題を解決するための方策を考案し、

方策に取り組み、その成果を明確にするものである（黒江ら，2014）。これら看護実践研究は、看護実践の改善・改革に直結するだけでなく、研究活動に関する職場風土の醸成、看護実践現場の人材育成や看護生涯学習支援に寄与するものであり、非常に実践性が高く、実践現場にとって有用な研究活動であると考えられる。

本学は、開学した平成12年度から、全教員による組織的な実施体制の下、県内看護職者との共同研究事業に取り組んでいる。これは、看護実践の改善・改革を目指し、現場看護職者と大学教員が協働して取り組み、現場の複雑で多様な看護実践上の課題を共に解決していく研究活動である。共同研究に取り組むことで、現場看護職のケアに対する認識が変化し、看護実践の改善に積極的に取り組むようになる等が確認されている（岐阜県立看護大学，2009）。このような変化が現場看護職に表れていることから、本学の共同研究には、看護実践研究としての重要な考え方や方法が含まれていると考えられる。また、本学博士前期課程の研究活動においても、看護実践の改善・改革を目指し、現場の複雑で多様な実践上の課題を解決するという、同じ方向性とプロセスを経て研究活動が行われているが、これら看護実践研究の特質は十分に明らかにされていない。

現場看護職が所属組織のインナーリサーチャーとして、現場の課題解決に向けて他の実践者に働きかけ、そのプロセス・成果を研究データとして取り扱い、論理的にまとめていく研究活動、すなわち看護実践研究の特質を明確にすることは、実践改善を可能にし、現場で実践知が創出されていくためにも必要かつ重要である。また、看護学の大学としては、現場の課題を創造的かつ組織的に解決できる人材を育成することに貢献するとともに、看護職者への生涯学習支援のあり方に有用な示唆を与え、実践性・応用性に富む看護学の確立・発展に寄与すると考える。

本研究は、本学の共同研究及び博士前期課程の研究活動から、看護実践研究の特質を明確化することを目的とするものである。本稿は、その第一段階として、現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質の明確化を目的とする。

## II. 方法

### 1. 看護実践研究の分析枠組みとなる構成要素の検討

看護実践研究の特質を明確化するための分析枠組みを

作成するために、看護実践研究の一つ一つのプロセスを丁寧に確認しながら進めている、本学博士前期課程の研究指導内容から導くこととする。

#### 1) 分析対象の選定理由

分析対象は、看護実践研究に3年間にわたって取り組む、本学の博士前期課程3年次における研究指導（集団指導）の内容である。本学学生は、自施設・自部署における看護実践の現状分析から実践上の課題を明確にし、課題解決に向けて取り組み、その成果を明らかにする研究を実施し、修士論文を作成する（岐阜県立看護大学大学院看護学研究科、2015）。学生は所属組織の看護職であると同時にインナーリサーチャーとして、職場の課題解決に向けた看護実践研究に取り組むものである。

分析対象とした研究指導の内容は、3年次という时期的にも、修士論文の作成に向けて、学生が取り組んできた看護実践研究のプロセス・成果を研究データとして論理的に再構成していくことの指導が中心である。また、学生が職場の課題解決に向けて取り組んだことを看護実践研究として意味づけし、看護実践研究の修士論文として結果に明示すべきことは何か、考察として論じるべきことは何かを各学生の立場や取り組みの目的に応じて丁寧に教授するものである。

以上のことから、本学博士前期課程における研究指導の内容には、看護実践研究として必要かつ重要な要素が網羅されていると考えられ、研究指導内容から看護実践研究の構成要素を抽出し、看護実践研究の特質を明確化するための分析枠組みとする。

#### 2) データの収集・分析方法

平成19年6月～12月（7月を除く）に実施された、本学の博士前期課程3年次生の研究指導（集団指導）にオブザーバーとして参加観察（計6回）し、学生の指導教員である教授3名の発言内容を記録する。発言内容の記録から、意味のある一文あるいは文章ごとに取り出して要約を作成して類似する意味内容で分類し、さらにそれらを統合して看護実践研究の構成要素を明確化する。

発言内容の記録から意味のある一文あるいは文章を取り出す際は、体裁を整える等の論文作成における基本的な指導内容は除き、学生が看護実践研究に取り組み、その成果を研究論文として論理的に明確化していくために指導された内容、すなわち看護実践研究として必要かつ重要と思われる指導内容に着目して抽出する。

## 2. 看護実践研究の構成要素の観点からの共同研究報告書の記述内容に関する質的分析

上記1の看護実践研究の構成要素を用いて、共同研究の報告書における記述内容から構成要素に関する内容を抽出する。

#### 1) 分析対象

平成15年度～20年度において取り組まれた共同研究の研究課題のうち、当該期間中に3年以上継続して取り組まれた研究課題の中から選定した研究課題の共同研究報告書の記述内容をデータとする。本学の共同研究報告書は、共同研究事業の成果報告書として毎年度末に発刊され、各研究課題は取り組み年度において6頁以内の報告が求められている。

3年以上継続している共同研究としたのは、少なくとも3年以上の取り組みであれば、現場の実態把握や課題の明確化のプロセスを経て、看護実践の改善・改革を意図した取り組みと成果評価まで実施されていることが予測され、これらに関する内容が共同研究報告書に記載され、そこに看護実践研究の特質が含まれているであろうと考えたからである。

また、看護実践の改善・改革に焦点をあてた研究活動を分析対象としたいと考えたため、3年以上継続して取り組まれた研究課題の中から、人材育成に関する研究課題及び尺度開発に関する研究課題は除く。次いで、研究主題が重ならないようにするとともに、共同研究者（現場看護職）の代表が所属する施設の種別及び職種が偏らないように考慮して分析対象となる研究課題を選定する。

#### 2) データの収集・分析方法

選定した研究課題に関する共同研究報告書の記述内容から、方法1で明確化した看護実践研究の構成要素に該当する内容を取り出して要約を記述し、その内容を簡潔に整理して小項目を作成する。分析対象とした研究課題毎に、これらの小項目を類似する意味内容で質的帰納的に中項目まで分類する。次いで、共同研究における看護実践研究の構成要素の内容を抽出するために中項目まで分類した結果を統合し、大項目として分類を行う。

看護実践研究の構成要素の観点から抽出した共同研究報告書の記述内容を要約する際とそれらを意味内容で分類する際は、各研究活動や実践の特性を損なわないように留意して行っていく。

### 3. 研究の信頼性・妥当性の確保

本研究は、看護実践研究の特質の明確化を目指した質的研究であるため、本研究のデータ収集、データ分析全体を通して、看護学の教育及び質的研究の経験が豊富で、看護実践にも熟知した専門家にスーパーバイズを受けた。また、分析対象とした研究課題の共同研究報告書の記述内容は全て繰り返し読み、当該研究の取り組み内容・意図を理解するようにした。さらに、要約を作成し、類似する意味内容で分類する際には、報告書の記述内容との齟齬が無いように、意味内容の解釈を慎重にし、報告書の記述内容との照合も繰り返し実施した。これらを通して、研究の信頼性・妥当性の確保に努めた。

### 4. 倫理的配慮

本研究においては、方法1に関しては、筆者が参加した博士前期課程における集団指導の指導教授及び学生、方法2に関しては、分析対象とした共同研究の代表者に研究協力を依頼した。これらの研究協力者に対しては、書面とともに、研究の趣旨・方法・個人情報保護の方法、予測される成果、不利益への対応、自由意思による参加の保証、参加承諾後の協力拒否の自由について説明し、内容を十分に理解した上で了解が得られた場合のみ、分析対象のデータとした。

本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科の論文倫理審査部会の承認を得て実施した。承認番号は、20-A011-2（平成20年6月承認）及び21-A015-1（平成21年8月承認）である。

## Ⅲ. 結果

### 1. 看護実践研究の分析枠組みとなる構成要素

博士前期課程の集団指導における研究指導内容を類似する意味内容で分類した結果、9カテゴリを導出した。それらをさらに統合し、看護実践研究の構成要素として6要素が抽出された（表1）。以下、構成要素は『 』、研究指導内容のカテゴリは【 」、サブカテゴリは< >の記号で示す。また、実践者とは、看護職以外の職種を含めて、実践現場におけるケア・サービス提供者を指す。

#### 1) 現状分析から導かれた課題

【所属組織における看護実践の現状を分析して課題を明確にする】では、<職場の組織構成や活動体制等の現状を明確にする><組織の方針・現状を診断し、組織全体の考え方・課題を捉えて整理する>が含まれており、また【所属組織の現状から導かれた課題の解決に向けて取り組む】ことも看護実践研究として求められていたことから、看護実践研究の構成要素として、『現状分析から導かれた課題』が抽出された。

#### 2) 職場での立場を踏まえた組織的取り組み

【所属組織における自己の立場・役割を踏まえながら組織的に取り組む】では、<看護実践現場における自らの立場・位置づけを明確に表現する><研究に取り組む上での組織における自らの役割、組織とかわる位置づけを明確にする><職場における立場で実践したことを結果として出し、考察する>ことが看護実践研究として求められていたことから、『職場での立場を踏まえた組織的取り組み』が抽出された。

#### 3) 利用者ニーズを基盤とした実践改善

【利用者ニーズの観点から看護実践を考案・試行し、そ

表1 看護実践研究の構成要素

構成要素	研究指導内容のカテゴリ（記述件数）
現状分析から導かれた課題	所属組織における看護実践の現状を分析して課題を明確にする(8)
	所属組織の現状から導かれた課題の解決に向けて取り組む(2)
職場での立場を踏まえた組織的取り組み	所属組織における自己の立場・役割を踏まえながら組織的に取り組む(8)
利用者ニーズを基盤とした実践改善	利用者ニーズの観点から看護実践を考案・試行し、その内容・成果を明確にする(16)
実践改善に向けた取り組みと成果の共有	研究の取り組み全体像と各取り組みの目的・内容・プロセスを明確にする(9)
	実践改善に向けて組織的に取り組む方法を開発し、そのプロセス・成果を明確にする(5)
	実践改善に向けた取り組みの内容・プロセス・成果・課題を明確にし、看護職へフィードバックする(26)
実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握	意図的に看護職の認識を高める働きかけを行い、認識の変化・成果を明確にする(11)
実践者間の連携・関係づくりの強化	実践者との連携及び関係づくりのプロセス・成果を明確にする(4)

の内容・成果を明確にする】では、＜患者・看護師関係の継続性を大事にして患者の側に立って看護を考える視点をもつ＞＜潜在ニーズに応じた援助を試行＞するなど、利用者ニーズを基盤に据えて看護実践の改善・改革に取り組む、その内容・成果を明確にすることが、看護実践研究として求められていたことから、『利用者ニーズを基盤とした実践改善』が抽出された。

4) 実践改善に向けた取り組みと成果の共有

【研究の取り組み全体像と各取り組みの目的・内容・プロセスを明確にする】では、＜取り組みの意図・目的を明確にする＞＜研究の取り組み全体像と取り組みの内容・プロセスをデータ化して示す＞等が含まれ、【実践改善に向けて組織的に取り組む方法を開発し、そのプロセス・成果を明確にする】では、＜組織的にスタッフ皆で取り組む方法を開発し、そのプロセスを明示する＞＜組織の動きと成果を経年的にみる＞等が含まれていた。また、【実践改善に向けた取り組みの内容・プロセス・成果・課題を明確にし、看護職へフィードバックする】では、＜同僚・他部署看護職へ実践方法を提案した際の反応や話し合い内容、実践方法の修正内容、合意形成プロセスをデータ化して明示する＞＜取り組み結果を看護職へフィードバックして、その意義・成果を事実で立証する＞等が含まれていた。実践改善に向けた取り組みや成果を職場スタッフと共有し、組織的に取り組む方法を開発するプロセスが看護実践研究として重視されていたことから、『実践改善に向けた取り組みと成果の共有』が抽出された。

5) 実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握

【意図的に看護職の認識を高める働きかけを行い、認識の変化・成果を明確にする】では、＜スタッフの認識を高めることを研究方法に位置づける＞＜スタッフの意識の高ま

り、認識の変化をデータ化して明示する＞等が含まれていた。職場スタッフの意識改革に向けた意図的働きかけを行い、その成果を明確にしていくことが看護実践研究として求められていたことから、『実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握』が抽出された。

6) 実践者間の連携・関係づくりの強化

【実践者との連携及び関係づくりのプロセス・成果を明確にする】では、＜誰とどのような活動をしたことによって連携が密になり円滑化したのかを示す＞＜他部署とのかかわりにより、どのように実践が改善されたのかを表現する＞等が含まれていた。実践改善に向けて、実践者間における連携・関係づくりの強化を意図した取り組みのプロセス・成果を明確にすることが看護実践研究として求められていたことから、『実践者間の連携・関係づくりの強化』が抽出された。

2. 現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の構成要素の内容

上述した看護実践研究の分析枠組みとなる構成要素を用いて、共同研究報告書の記述内容を質的に分析した。

1) 分析対象とした研究課題の概要

平成15年度～20年度において取り組まれた共同研究の研究課題のうち、3年以上継続して取り組まれている研究課題の中から選定した4研究ア～エ（表2）の共同研究報告書の記述内容をデータとした。また、各研究課題の主な研究活動は、表3に示した。

2) 共同研究における看護実践研究の構成要素の内容

上記の方法で選定した4研究課題の共同研究報告書の記述内容について、看護実践研究の構成要素毎に中項目まで分類した4研究の結果を統合して、大項目までの分類を行った結果13項目が導出された（表4）。以下、構成要素毎に、質的帰納的に分類された大項目について述べる。文中では、大項目を【 】、中項目を《 》の記号で示す。

表2 分析対象とした研究課題の概要

No.	研究課題名	研究期間	現場看護職（共同研究者）の所属施設	現場看護職代表の所属施設・職種
ア	慢性の病いとともにある生活に求められる看護援助および援助提供システムについての検討	平成13年度～20年度	病院（複数）	病院・看護師
イ	赤ちゃんにもお母さんにもやさしい地域づくりに向けての検討	平成16年度～20年度	診療所、病院、市町村（複数）	診療所・助産師
ウ	難病患者支援にかかわる専門職の活動の現状と課題およびその解決策の検討	平成12年度～17年度	県保健所、病院、訪問看護ステーション、県保健医療課、診療所、在宅介護支援センター（複数）	県保健所・保健師
エ	特別養護老人ホームにおけるショートステイ利用者のケアの充実に向けて	平成18年度～20年度	特別養護老人ホーム（複数）	特別養護老人ホーム・看護師

表3 分析対象とした研究課題の主な研究活動

No.	研究期間における継続的な研究活動
ア	H13: 県内医療施設対象の糖尿病教育・ケアの実態調査、H14: 外来糖尿病患者対象の面接聞き取り調査、H15: 糖尿病患者対象の面接聞き取り調査、H16: 糖尿病教育入院終了者対象の面接聞き取り調査、H17: 糖尿病教育入院終了者対象の質問紙調査、H18: 共同研究者の看護援助内容の検討、H16・17年度の調査結果に基づく利用者が求めていることと必要な看護援助の検討、H19: 県内訪問看護ステーション対象の質問紙調査、H20: 糖尿病自己管理支援リーフレットや診療所外来バスの作成、A地区での糖尿病研修会の開催
イ	H16: 県内産科医療施設対象の母乳育児支援の実態調査、H17: 母親対象のケア評価調査、H18: 母乳育児に関する現任教育内容の検討と実施、H19: ワークショップ開催、母乳育児支援についての保健師のニーズ調査、H20: ワークショップ開催
ウ	H12: 難病患者と家族の実態把握と看護職の役割の検討、H13: 難病相談会来談者の援助ニーズ調査と継続援助の事例検討、在宅難病患者の療養生活実態把握と看護職の役割の検討、H14: 相談会後の継続援助の検討、外来患者の支援体制づくりの検討、H15: 相談会後の継続援助の検討、医療機関での難病患者支援に関する課題の検討、H16: 相談会後の継続援助の検討、事例検討会、連携を強める体制づくりの検討、H17: 多職種による難病患者の地域支援を考える研究会の立ち上げ
エ	H18: 特別養護老人ホームにおけるショートステイ受け入れに関する現状と課題の明確化のための調査準備、H19: 県内特別養護老人ホーム対象の質問紙調査、H20: 共同研究者の体験に基づく事例検討会、事例検討内容からのショートステイ利用者のケアにおける看護職に期待される役割と取り組みの検討

(1) 現状分析から導かれた課題

本構成要素においては、【利用者ニーズや支援の実態が明らかではない現状がある】【把握した利用者ニーズや支援の実態から、実践上の課題を明確にする】【実践者間での意見交換や事例検討を通して、支援の現状や課題を明確にする】の3項目が導出された。

①利用者ニーズや支援の実態が明らかではない現状がある

本項目は、「県内の糖尿病教育の実態が明らかではない現状がある」「県内の母乳育児支援の実態や支援ニーズが明らかではない現状がある」から導出した。県内の【利用者ニーズや支援の実態が明らかではない現状がある】ことを起点とし、実践現場の現状を明確化する必要性から共同研究の取り組みが始まっていた。

②把握した利用者ニーズや支援の実態から、実践上の課題を明確にする

本項目は、「患者を対象にした聞き取り調査により、糖尿病と共にある生活の実態や援助ニーズを明らかにする」「母乳育児支援にかかわる看護職から捉えた母乳育児への支援の実態から、実践上の課題を明確にする」などから導出した。調査によって把握した利用者ニーズや実践者から捉えた支援の実態から看護実践現場の現状を分析し、実践上の課題を明確化することに取り組まれていた。

③実践者間での意見交換や事例検討を通して、支援の現状や課題を明確にする

本項目は、「母乳育児支援にかかわる看護職同士の意見交換を通して、実践上の課題を明確にする」「難病患者支援にかかわる人々の意見交換の結果から、実践現場の現状や課題、取り組みの必要性を明らかにする」などから導出した。意見交換や事例検討を通して、実践者の生の声を

捉えることを重視し、現場のリアルな実態から、支援の現状や実践上の課題を浮き彫りにすることに取り組まれていた。

(2) 職場での立場を踏まえた組織的取り組み

本構成要素においては、【現場看護職や管理職が所属施設の特性や自己の立場を踏まえて研究活動に参加する】の1項目が導出された。本項目は、「現場看護職者は所属施設の特性や立場を踏まえて共同研究に参加する」「共同研究施設の所属長が積極的に共同研究に参加する」を含むものであった。

(3) 利用者ニーズを基盤とした実践改善

本構成要素においては、【利用者の思いやニーズに基づいて、看護職に求められる役割や必要な支援・体制づくりを検討する】【実践者間での意見交換や事例検討を通して、利用者ニーズを基盤にしたより良い援助を検討し実践の充実を図る】の2項目が導出された。

①利用者の思いやニーズに基づいて、看護職に求められる役割や必要な支援・体制づくりを検討する

本項目は、「糖尿病患者の思いや現状に基いて、専門職としての援助姿勢や必要な援助を検討する」「患者・家族から捉えた生活の実態や援助ニーズを基に、看護職の役割及び今後の対応を検討する」「外来における患者からの相談内容と看護師の対応を把握し、外来患者の支援体制づくりを検討する」などから導出した。把握した利用者の思いや生活実態、ニーズを基盤にしなが、実践改善に向けて、看護職に求められる役割や必要な支援・支援体制づくりを検討することに取り組まれていた。

②実践者間での意見交換や事例検討を通して、利用者ニーズを基盤にしたより良い援助を検討し実践の充実を図る

本項目は、「事例検討を通して、ショートステイ利用者の

表4 現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の構成要素の内容

構成要素	大項目（記述件数）	中項目（抜粋）
現状分析から導かれた課題	利用者ニーズや支援の実態が明らかではない現状がある(2)	県内の糖尿病教育の実態が明らかではない現状がある(ア)
		県内の母乳育児支援の実態や支援ニーズが明らかではない現状がある(イ)
	把握した利用者ニーズや支援の実態から、実践上の課題を明確にする(15)	患者を対象にした聞き取り調査により、糖尿病と共にある生活の実態や援助ニーズを明らかにする(ア)
		母乳育児支援にかかわる看護職から捉えた支援の実態から、実践上の課題を明確にする(イ)
実践者間での意見交換や事例検討を通して、支援の現状や課題を明確にする(8)	母乳育児支援にかかわる看護職同士の意見交換を通して、実践上の課題を明確にする(イ)	
	難病患者支援にかかわる人々の意見交換の結果から、実践現場の現状や課題、取り組みの必要性を明らかにする(ウ)	
職場での立場を踏まえた組織的取り組み	現場看護職や管理職が所属施設の特性や自己の立場を踏まえて研究活動に参加する(2)	現場看護職者は所属施設の特性や立場を踏まえて共同研究に参加する(イ)
		共同研究施設の所属長が積極的に共同研究に参加する(イ)
利用者ニーズを基盤とした実践改善	利用者の思いやニーズに基づいて、看護職に求められる役割や必要な支援・体制づくりを検討する(10)	糖尿病患者の思いや現状に基いて、専門職としての援助姿勢や必要な援助を検討する(ア)
		患者・家族から捉えた生活の実態や援助ニーズを基に、看護職の役割及び今後の対応を検討する(ウ)
	実践者間での意見交換や事例検討を通して、利用者ニーズを基盤にしたより良い援助を検討し、実践の充実を図る(8)	事例検討を通して、ショートステイ利用者のケアにおける期待される看護職の役割とその人らしさを尊重したケアのために必要な取り組みを検討する(エ) 継続援助の必要な難病患者を支援するために、相談会後のカンファレンスで今後の援助方針を検討し、援助責任者を明確にする(ウ)
実践改善に向けた取り組みと成果の共有	実践改善に向けて協働して取り組み、その検討・実施・評価の内容・プロセスを研究者間で共有する(10)	共同研究者間で調査結果の分析・考察、ツール開発を行い、その内容・過程を共有する(ア) 現場看護職と大学教員が協働して、現任教育の内容・方法の検討、実施・評価に取り組む(イ)
	実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後の援助のあり方を検討できる場をつくる(19)	ワークショップでの報告や意見交換を通して、母乳育児にかかわる専門職者同士が母乳育児支援の現状と課題、今後のあり方を共有する場をつくる(イ) 高齢者ケアに携わる看護職者間の意見交換を通して、ショートステイ利用者のニーズや現状、課題および課題への取り組み状況を共有する(エ)
	研究成果を看護実践現場に還元する(3)	地域で糖尿病ケアにかかわる専門職者に本研究で開発したツールを紹介する(ア) 本研究の取り組みにより可能になった難病相談会を契機にした継続支援を県下全域に広める(ウ)
実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握	実践者への学習的取り組みを通して、実践改善に向けた共通認識づくりや知識・意欲の向上を図る(16)	地域において糖尿病ケアにかかわる専門職者を対象にした研修会を開催し、糖尿病療養指導に関する知識・意欲の向上や看護実践の充実・改善を図る(ア) 難病患者支援に携わる多職種との研究会を通して、実践上の課題に関する共通認識を図る(ウ)
		学習ニーズに沿ったワークショップが母乳育児支援に携わる専門職者の看護生涯学習支援につながる(イ)
	現場の課題を意識した実践とその振り返りを積み重ねて、現場看護職の認識の変化やケア方法の創出を図る(11)	事例検討会を重ねることで、共同研究者(現場)のケア方法の学修や看護職の役割に関する認識の変化、看護実践の充実につながる(エ) 共同研究者(現場)が自施設でショートステイ利用者の実践上の課題に意識的に取り組むことにより、ケア方法が創出される(エ)
実践者間の連携・関係づくりの強化	実践の充実に向けて、多機関・多職種間の連携・関係づくりの強化や支援体制づくりを図る(16)	母乳育児支援に携わる看護職同士が互いを理解して支援につなげていくための関係性やネットワークをつくる(イ) 継続支援の充実に向けて、保健所・市町村及び患者団体が連携した難病患者支援体制づくりを行う(ウ)
		定期的な検討会の開催により、共同研究者が相互に相談できる場となる(ア) 共同研究者(現場)間において、相互理解や協力関係が構築される(エ)
	現場看護職同士が相互理解を深め協力関係を構築する(3)	

注：中項目の文末の（ ）内は、分析対象の研究課題を示す

ケアにおける期待される看護職の役割とその人らしさを尊重したケアのために必要な取り組みを検討する》《継続援助の必要な難病患者を支援するために、相談会後のカンファレンスで今後の援助方針を検討し、援助責任者を明確にする》

などから導出した。ケアに携わる実践者同士が意見交換や事例検討を通して、利用者ニーズを基盤にしてより良い援助を共に追求していくこと自体が、研究活動として実践現場で意図的に取り組まれていた。

#### (4) 実践改善に向けた取り組みと成果の共有

本構成要素においては、【実践改善に向けて協働して取り組み、その検討・実施・評価の内容・プロセスを研究者間で共有する】【実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後の援助のあり方を検討できる場をつくる】【研究成果を看護実践現場に還元する】の3項目が導出された。

##### ①実践改善に向けて協働して取り組み、その検討・実施・評価の内容・プロセスを研究者間で共有する

本項目は、《共同研究者間で調査結果の分析・考察、ツール開発を行い、その内容・過程を共有する》《現場看護職と大学教員が協働して、現任教育の内容・方法の検討、実施・評価に取り組む》などから導出した。実践改善に向けて現場看護職と大学教員が協働して取り組んでおり、その内容やプロセスを共有することが重視されていた。

##### ②実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後の援助のあり方を検討できる場をつくる

本項目は、《ワークショップでの報告や意見交換を通して、母乳育児にかかわる専門職者同士が母乳育児支援の現状と課題、今後のあり方を共有する場をつくる》《高齢者ケアに携わる看護職者間の意見交換を通して、ショートステイ利用者のニーズや現状、課題及び課題への取り組み状況を共有する》などから導出した。実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後のあり方を一緒に検討できる場を意図的につくるのが、研究活動として取り組まれていた。また、単に支援の現状と課題を共有するのではなく、研修会・ワークショップ、事例検討等において、実践の振り返りや参加者同士の自施設における現状と課題についてディスカッションを行い、ケアに携わる人同士が意見交流することで相互理解が促されるものであった。これらは、ある地域の看護職者・関係者を対象に行うものや広く県内看護職者・関係者を対象にするものなど多様であった。

##### ③研究成果を看護実践現場に還元する

本項目は、《地域で糖尿病ケアにかかわる専門職者に本研究で開発したツールを紹介する》《本研究の取り組みにより可能になった難病相談会を契機にした継続支援を県下全域に広める》などから導出した。研究課題によっては、共同研究者の所属施設だけの実践改善ではなく、他施設や他地域においても新しい実践方法が適用されることが望ましいこともあるため、研究成果の共有を共同研究者間でとどめず、ケアマニュアルに反映させる等看護実践現場に還元し、

県域全体の看護の質向上に寄与することも意図されていた。

##### (5) 実践者の意識改革に向けた意図的働きかけとその成果把握

本構成要素においては、【実践者への学習的取り組みを通して、実践改善に向けた共通認識づくりや知識・意欲の向上を図る】【現場の課題を意識した実践とその振り返りを積み重ねて、現場看護職の認識の変化やケア方法の創出を図る】の2項目が導出された。

##### ①実践者への学習的取り組みを通して、実践改善に向けた共通認識づくりや知識・意欲の向上を図る

本項目は、《地域において糖尿病ケアにかかわる専門職者を対象にした研修会を開催し、糖尿病療養指導に関する知識・意欲の向上や看護実践の充実・改善を図る》《難病患者支援に携わる多職種との研究会を通して、実践上の課題に関する共通認識を図る》《学習ニーズに沿ったワークショップが母乳育児支援に携わる専門職者の看護生涯学習支援につながる》などから導出した。意識改革に向けた意図的働きかけとしては、現場看護職を対象にした研修会・ワークショップ、多職種との研究会といった学習的取り組みが確認された。これらの意図的働きかけの成果としては、実践改善に向けた実践者の意欲向上に加えて、実践に対する理解や認識の深まりにつながり、生涯学習支援としての側面もあった。

##### ②現場の課題を意識した実践とその振り返りを積み重ねて、現場看護職の認識の変化やケア方法の創出を図る

本項目は、《事例検討会を重ねることで、共同研究者（現場）のケア方法の学修や看護職の役割に関する認識の変化、看護実践の充実につながる》《共同研究者（現場）が自施設でショートステイ利用者の実践上の課題に意識的に取り組むことにより、ケア方法が創出される》などから導出した。現場看護職が現場の課題を意識して実践に取り組み、事例検討会で看護を振り返ることを積み重ねていくことは、研究活動の一環としての意図的な学習的取り組みであり、その成果として看護職の認識の変化やケア方法の創出が確認された。

##### (6) 実践者間の連携・関係づくりの強化

本構成要素においては、【実践の充実に向けて、多機関・多職種間の連携・関係づくりの強化や支援体制づくりを図る】【現場看護職同士が相互理解を深め協力関係を構築する】の2項目が導出された。

#### ①実践の充実に向けて、多機関・多職種間の連携・関係づくりの強化や支援体制づくりを図る

本項目は、《母乳育児支援に携わる看護職同士が互いを理解して支援につなげていくための関係性やネットワークをつくる》《継続支援の充実に向けて、保健所・市町村及び患者団体が連携した難病患者支援体制づくりを行う》などから導出したものである。これらは、より良い実践の具現化を目指して、実践にかかわる者同士の機関・職種を超えた連携・関係づくりの強化や支援体制づくりを意図した研究活動であった。

#### ②現場看護職同士が相互理解を深め協力関係を構築する

本項目は、《定期的な検討会の開催により、共同研究者が相互に相談できる場となる》《共同研究者（現場）間において、相互理解や協力関係が構築される》から導出した。共同研究における取り組みとしての検討会などの場は、現場看護職同士が互いに相談できる場として機能し、相互理解を深めて協力関係を構築することに寄与するものであった。

### IV. 考察

本研究では、現場看護職と大学教員が取り組んだ共同研究（4研究）の報告書の記述内容について、看護実践研究の構成要素に該当すると考えられる内容を取り出し、類似する意味内容で質的帰納的に分類した。この結果を基に、共同研究における看護実践研究の特質について考察する。大項目は【 】の記号で示す。

#### 1. 利用者与实践者双方の観点からの現状分析による実践上の課題の明確化

研究課題の見つけ方として、臨床の場における課題発見と先行研究からの課題発見がある（南，2008）が、本学の共同研究では、【利用者ニーズや支援の実態が明らかでない現状がある】ことを起点として、利用者本人やケア施設への調査によって【把握した利用者ニーズや支援の実態から、実践上の課題を明確にする】ことに取り組まれていた。このことから、利用者与实践者双方の観点から看護実践現場の現状を分析して、実践上の課題を明確化し、その課題解決に取り組むことは、共同研究における看護実践研究の特質であると考えられた。また、河原畑ら（2005）が、「看護実践現場における看護の変革・質の向上に向けた研究課題は、現状の客観的な把握・分析により導かれることが必

要である」と述べているように、看護実践現場の実態に関する客観的な現状分析から研究課題を設定し、看護実践の改善・改革を追究することは、看護実践研究として必要かつ重要であると考ええる。

本研究では、実践上の課題を明確にする方法として、【実践者間での意見交換や事例検討を通して、支援の現状や課題を明確にする】が確認された。実践者の問題意識や困りごと等、生の声を引きだし、リアルな現場の実態から実践上の課題を明確化することに取り組まれていた。これは、実践者同士が互いに現状を確認し合い、実践上の課題を再認識する機会にもなると考える。実践者が言語化していない問題意識や実態を重視し、そこから実践上の課題を明確化することは、現場で実践者同士が協働して実践改善に取り組むための研究活動を展開していく上で重要であり、そこを重視することは看護実践研究の特質であると考ええる。

#### 2. 利用者ニーズを中核にした看護実践方法の創出と還元

本学の共同研究では、【利用者の思いやニーズに基づいて、看護職に求められる役割や必要な支援・体制づくりを検討する】【実践者間での意見交換や事例検討を通して、利用者ニーズを基盤にしたより良い援助を検討し、実践の充実に図る】ことに取り組まれており、利用者ニーズを中核にしてより良い援助や支援体制を追究していることが確認された。また、【実践改善に向けて協働して取り組み、その検討・実施・評価の内容・プロセスを研究者間で共有する】【実践者同士が支援の現状と課題を共有し、今後の援助のあり方を検討できる場をつくる】【現場の課題を意識した実践とその振り返りを積み重ねて、現場看護職の認識の変化やケア方法の創出を図る】といった、実践改善に向けて現場看護職と大学教員が協働して取り組み、研究活動のプロセスや支援の現状と課題を共有しながら、より良い援助のあり方を追究していることも確認されている。これらのことから、看護実践現場における実践の現状と課題を基盤にして、現場看護職と大学教員が検討を繰り返しながら利用者ニーズを中核にして新たな実践方法を編み出し創出することは、共同研究における看護実践研究の特質であると考ええる。

また、《地域で糖尿病ケアにかかわる専門職者に本研究で開発したツールを紹介する》《本研究の取り組みにより可能になった難病相談会を契機にした継続支援を県下全域に広める》といった、共同研究を通して創出した実践方法の

研修会での伝達やケアマニュアルへの反映等が行われており、【研究成果を看護実践現場に還元する】ことに意図的に取り組まれていた。このように利用者ニーズを中核にして創出した実践方法を現場に還元させていくことは、共同研究における看護実践研究の特質であると考えられる。しかし、分析対象とした共同研究は、県域全体の課題に取り組むものが含まれており、共同研究者（看護職）の所属施設だけでなく、県域全体の看護の質向上を意図していた点は考慮しなくてはならない。一方、共同研究に携わる大学教員としては、研究成果を政策やマニュアル等に反映されることにまで責任を持つことが必要である（大川ら，2005）。利用者ニーズを中核にして創出した実践方法が現場で確実に活用され定着していくこと、そこまでを視野に入れて共同研究を行うことは、看護実践研究として重要であると考えられる。

### 3. 看護実践の振り返りや意見交流を基盤にした実践者の意識改革の推進

実践改善に向けて実践者の意識改革を図るための意図的働きかけとして、《地域において糖尿病ケアにかかわる専門職者を対象にした研修会を開催し、糖尿病療養指導に関する知識・意欲の向上や看護実践の充実・改善を図る》《難病患者支援に携わる多職種との研究会を通して、実践上の課題に関する共通認識を図る》といった、【実践者への学習的取り組みを通して、実践改善に向けた共通認識づくりや知識・意欲の向上を図る】ことに取り組まれていた。その方法としては、研修会・ワークショップや研究会、事例検討等が挙げられる。これらは、実践の振り返りや意見交流を基盤にした学習的取り組みであり、研究活動として意図的に行われていた。看護実践の改善・改革のためには、実践に携わる看護職者・関係職種といった実践者の意識改革が土台となるため、その人々の意識に向けて働きかけて実践者間の共通認識をつくることは不可欠であると考えられる。批判的な振り返りは、実践に関する自分のパースペクティブの変化に結びつく（Cranton, 1995/2004）が、実践の振り返りや意見交流といった方法により、実践者が専門職者として現状から自らを省察し、気づきを得ることは、実践改善に向けた意識改革を推進する上でも有用な方法と思われる。

また、《学習ニーズに沿ったワークショップが母乳育児支援に携わる専門職者の看護生涯学習支援につながる》といったように、実践者の学習ニーズに沿いながら、実践上の課題解決に向けた学習的取り組みが企画・実施されてお

り、それは実践者の生涯学習支援の側面も併せ持つものであった。

以上のことから、看護実践の振り返りや意見交流を基盤にした学習的取り組みにより、実践者の意識改革や知識・意欲の向上に向けて意図的に働きかけることは、共同研究における看護実践研究の特質であると考えられる。

### 4. 多機関・多職種連携及び実践者間の関係づくりの強化

利用者主体の実践を提供するためには、共同研究者である現場看護職の所属施設・部署内の横断的連携にとどまらず、多機関・多職種との連携が必要不可欠である。本学の共同研究においては、《母乳育児支援に携わる看護職同士が互いを理解して支援につなげていくための関係性やネットワークをつくる》《継続支援の充実に向けて、保健所・市町村及び患者団体が連携した難病患者支援体制づくりを行う》といった、【実践の充実に向けて、多機関・多職種間の連携・関係づくりの強化や支援体制づくりを図る】ことに取り組まれていた。また、事例検討会等を通して、実践者同士の顔の見える関係性が構築され、多機関・多職種連携の強化が意図的に図られていた。これらの取り組みは、互いの相互理解を深めていき、利用者ニーズを中核にした実践を提供するために必要な連携方法の検討や支援体制づくりにつながったと考える。以上のことから、実践の充実・改善に向けて、多機関・多職種連携及び実践者間の関係づくりの強化に意図的に取り組むことは、共同研究における看護実践研究の特質と考える。

### V. 本研究の限界と課題

本研究において、現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質の明確化に取り組んだことで、看護実践研究の特質の明確化に関する研究の第一段階として、看護実践研究の特質に迫ることができた。一方、近年、本学における共同研究の取り組み自体が、現場の実践上の課題に応じて多様化してきている。共同研究を現場看護職の看護生涯学習支援のひとつとして位置づけ、看護実践現場が組織として意図的に共同研究を活用しているものも見受けられるようになってきた。そこで、本研究で明確化した共同研究における看護実践研究の特質について、近年に取り組まれた共同研究での検証が必要と考える。

また、今回、看護実践研究のプロセスの観点からの分析

はしていないが、研究活動のプロセスの観点から特質を検討することも必要であろう。今後は、本学博士前期課程の研究活動における看護実践研究の特質を明確にし、本研究結果も踏まえて総合的に考察することで、看護実践研究の特質を探究し明確化を図る。

## VI. 結論

看護実践研究の特質の明確化に関する研究の第一段階として、現場看護職と大学教員の共同研究における看護実践研究の特質の明確化に取り組んだ。その結果、共同研究における看護実践研究の特質として、以下の4点が考えられた。

1. 利用者与实践者双方の観点からの現状分析による実践上の課題の明確化
2. 利用者ニーズを中核にした看護実践方法の創出と還元
3. 看護実践の振り返りや意見交流を基盤にした実践者の意識改革の推進
4. 多機関・多職種連携及び実践者間の関係づくりの強化

## 謝辞

本研究にご協力いただいた皆様並びに、ご指導いただいた岐阜県立看護大学大学院看護学研究科の黒江ゆり子教授、北山三津子教授、服部律子教授をはじめとする諸先生方に深く感謝申し上げます。

本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科における博士論文の一部を加筆・修正したものである。

## 文献

Abdellah, F.G., Levine, E. (1986/1993). 矢野正子 (監訳), アブデラの看護研究—よりよい患者ケアのために (p.5). メヂカルフレンド社.

Cranton, A.P. (1995/2004). 入江直子, 三輪建二 (監訳), おとなの学びを創る—専門職の省察的実践をめざして (p.166). 鳳書房.

江本リナ. (2010). アクションリサーチとは. 筒井真優美 (編), 研究と実践をつなぐアクションリサーチ入門—看護研究の新たなステージへ (p.11). ライフサポート社.

岐阜県立看護大学. (2009). 岐阜県立看護大学の共同研究事業 数字で見る9ヵ年の実績.

岐阜県立看護大学大学院看護学研究科. (2015). 大学院学生便覧 平成27年度. 岐阜県立看護大学大学院.

細川英雄. (2005). 実践研究とは何か—「私はどのような教室をめざすのか」という問い—. 日本語教育, 126, 4-14.

河原畑尚美, 小野幸子. (2005). 看護の変革・質の向上に向けた看護実践上の研究課題を見出す方法について. 日本看護学会論文集—看護管理, 36, 350-352.

北島洋子. (2012). 臨床から発表される論文の検討. 看護研究, 45(7), 649-658.

黒田久美子. (2006). 臨床実践に本当に役立つ臨床看護研究を行うために病院はどのような環境を整えるべきか. インターナショナルナーシングレビュー, 29(1), 23-28.

黒江ゆり子, 北山三津子. (2014). 看護実践研究の可能性と意義 その1. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 157-164.

草郷孝好. (2007). アクション・リサーチ. 小泉潤二, 志水宏吉 (編), 実践的研究のすすめ 人間科学のリアリティ (p.252). 有斐閣.

南裕子. (2008). 看護における研究の役割. 南裕子 (編), 看護における研究 (pp.22-23). 日本看護協会出版会.

大川眞智子, 岩村龍子, 平山朝子. (2005). 現場の看護実践向上を目指した大学教員と現地看護職の共同研究の基盤づくり. 日本地域看護学会第8回学術集会講演集, 98.

大川眞智子, 岩村龍子, 田辺満子ほか. (2015). 岐阜県立看護大学における看護実践研究支援の成果と課題. 岐阜県立看護大学紀要, 15(1), 139-148.

坂下玲子, 西平倫子, 西谷美保. (2012). 臨床看護師が取り組む看護研究の実態. 看護研究, 45(7), 638-642.

下山晴彦. (2009). 心理学の実践研究育成という企て. 臨床心理学, 9(1), 3-7.

田中雅重, 立花めぐみ, 永井郁代ほか. (2006). 臨床での看護研究活動における困難と看護研究推進への課題, 日本看護学会論文集—看護管理, 36, 484-486.

宇多絵里香. (2012). 臨床看護研究に関する文献検討. 看護研究, 45(7), 630-637.

(受稿日 平成28年8月29日)

(採用日 平成29年1月30日)

**Study on Clarification of Characteristics of Nursing Practice Research Part1  
-Characteristics of Nursing Practice Research in Collaborative Research  
by Nurses and University Faculty-**

Machiko Ohkawa

Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

**Abstract**

Gifu College of Nursing has conducted collaborative research by nurses and university faculty, and research activities in the master's program as part of nursing practice research with the goal of improving and innovating nursing practice, but the characteristics of nursing practice research have yet to be clarified. As the first step to clarify the characteristics of nursing practice research, this study aims to clarify the characteristics of nursing practice research in collaborative research by nurses and university faculty.

To formulate the analytical framework for nursing practice research, the research curriculum of our master's program, which is proceeded based on careful confirmation of each process of nursing practice research, was recursively categorized to extract the components of nursing practice research. Next, the four collaborative researches of our college were examined to extract the content that might correspond to the components of nursing practice research, while the extracted content was categorized with similar semantic content.

Six components of nursing practice research were extracted, which includes "issues derived from analysis of current status," "improvement of nursing practices based on the users' needs," "initiatives for practice improvement and sharing of outcome," and "intentional efforts made for improving the awareness of the nursing staff and their outcome."

As for the components of nursing practice research in collaborative research, 13 components were extracted which include "to clarify current status and issues of nursing support by exchanging opinions and considering relevant cases," "to consider the role of nurses and setting up of a necessary support system based on users' desires and needs," "to create a forum for nursing staff to share the current status and issues of nursing support and to discuss how to improve it," and "to promote common recognition, knowledge, and motivation for improved nursing through a hands-on learning process."

The above results then derived the following characteristics of nursing practice research in collaborative research by nurses and university faculty: 1.the clarification of practice issues by means of present data analysis based on the viewpoints from both the users and the nursing staff, 2.the construction and the returning of nursing practice methods based on users' needs, 3.the promotion of improving the awareness of the nursing staff through a learning approach based on the review of nursing practice and exchange of opinions, and 4.the strengthening of multidisciplinary collaborations with diverse institutions and relationships between the nursing staff.

**Key words:** nursing practice research, collaborative research, users' needs, improving practice